

〈調査報告〉

マレーシアのホームステイ・プログラムとツーリズム
—ペナン島テロツ・バハンのホームステイの場合—

Homestay Program in Malaysia and Tourism :
A Case of Homestay Program in Teluk Bahang of Penang Island

江口 信清*

要 約

日本では、ホームステイ (homestay) という語とその実践は1980年代より一般化してきた。近年、報酬を伴うホームステイ・プログラムは経済振興の一手段として観光と結び付けられ、日本だけではなく諸外国で推進されるようになってきた。とりわけ、農村や少数民族社会でのホームステイは、ただたんにホスト・ファミリーに経済的に貢献するだけではなく、ファミリーが属するコミュニティにも多大な貢献をする場合もある。これは、しばしば貧困削減を謳うプロプアーツーリズムの中身であり、コミュニティ・ベースド・ツーリズムとも称されてきた。本稿では、マレーシア北西部のペナン島でのホームステイ・プログラムを事例として取り上げ、それがどのようにコミュニティ・ベースド・ツーリズムになりえているのかということを検討することを目的にしている。

Abstract

In Japan the term *homestay* and its practice has prevailed since 1980s. Recently, homestay programs for fees have been regarded as a means of economic development and been promoted in the developing

* 立命館大学文学部教授

countries. Especially those homestay programs among the ethnic minorities and rural villages often contribute economically not only for the host families but for the community as a whole. This is the content of the so-called pro-poor tourism and is referred as a community-based-tourism. This paper aims to examine how a homestay program functions as a community-based-tourism and whether it can be a sustainable tourism, using a case of homestay program in the northwestern Penang Island of Malaysia.

キーワード：ホームステイ、マレーシア、ツーリズム

Key Words : homestay, Malaysia, tourism

1. はじめに

日本ではホームステイ (homestay) という語は定着しているといっても過言ではないが、これは英語の homestay の訳で、日本では1980年代より一般化し、英語圏では2004年に *The Oxford English Dictionary* で新出単語としてはじめて採択されたという。しかし、「ホームステイ」が実践されたのはずっと以前の1933年のことで、アメリカ合衆国の一民間人 Donald Beates Watt が、自国の十代の学生をドイツとオーストリアへ連れて行き、文化体験をさせたのが最初であるという (山口 2008: 31; 山口 2009: 53)。貨幣経済があまり発達せず、多くの人たちが自分たちの村落やその周辺の小宇宙的世界で終生を過していた時代には、日本でも、あるいは諸外国でも現金という形での報酬を要求することなく、旅人である異人を宿泊させるといった慣習はあったことが知られている (赤坂 1992: 89; 江口 1990: 40; 他)。これは異人に対するホスピタリティであったのだろう。

他方、一般家庭で、現金という形での報酬を前提に宿泊させるといった試

みは近年のことであり、学生が国の内外へ短期留学する場合などでもホームステイをしながら、教育機関へ通うようなケースも多くみられる。近年、このような報酬を伴うホームステイ・プログラムが経済振興の一手段として観光と結び付けられ、諸外国で推進されるようになってきた。とりわけ、農村や少数民族のコミュニティでのホームステイは、ただたんにホスト・ファミリーに経済的に貢献するだけでなく、ファミリーが属するコミュニティにも多大な貢献をする場合もある。ゲストがコミュニティのホスト・ファミリー以外の人たちにガイドしてもらったり、踊りや楽器の演奏などの文化ショーを演じてもらったり、あるいはコミュニティの人たちが製作する工芸品を購入したりすることによって、同じコミュニティの多くの人に経済的利益を与えるからである (van Weert 2008; Peaty 2008; Pongponrat 2009; Peaty 2009; Yahaya 2009; 他)。これがしばしば貧困削減を謳うプロプアーツーリズムの中身であり、コミュニティ・ベースド・ツーリズムとも称されてきた。マスツーリズムに飽き足らない観光客の出現は、マスツーリズムの対極にある「もう一つの観光」をとくに1980年代以降生み出した。その中でも現地の人たちの経済環境の改善にも貢献できるコミュニティ・ベースド・ツーリズムのようなタイプの観光は、観光客の観光することへの後ろめたさを和らげることにもなる。大量の観光客が不断に既存の観光地を訪れることで、現地の自然環境に悪影響を与えるだけでなく、現地コミュニティの文化の変容を進める元凶として非難されることもあるマスツーリズムに対して、この種のツーリズムは途上国で徐々に実践されるようになってきた。

近代の観光客の特徴としてホンモノ性の追求をマッカネルは挙げたが、多くの社会では、ホンモノを体験したいがそれができない人たちと、プライバシーを見せることには抵抗があるものの、収入が欲しい人たちの妥協の産物として、舞台装置化されたホンモノ性が用意されてきた (MacCannell 1978)。それはたとえばモンゴルの観光客向けのゲルであり (小長谷 1996)、ベリーズ南部のマヤ語族の観光客用の小屋である (江口 1994)。し

かし、いずれも同じ屋根の下でホストファミリーと同じ経験を共有できるものではない。ゲストとホストの、プライバシーをめぐるせめぎあいの産物が、一方ではテレビなどのマスメディアで制作する、タレントなどが他国の家庭でのホームステイや、日本の地方の家庭で泊らせてもらう様子を映した番組である。他方が、近年のホームステイ・プログラムの誕生であろう。豪華なホテルなどの宿泊施設に泊まるだけでは異国の文化を味わうことはできない。ホンモノ性を体験することを熱望する人たちにとっては、一般人の家庭に滞在し、現地の人たちのホンモノの生活に少しでも近づき、いわゆる文化を間近に体験することは願ってもないことである。

本稿では、マレーシア北西部のパナン島でのホームステイ・プログラムを事例として取り上げ、それがどのようにコミュニティ・ベースド・ツーリズムになっているのか、そしてそれが持続的な観光になりえるのかどうかを検討することを目的にしている¹⁾。

2. マレーシアにおけるツーリズム振興とホームステイ・プログラム

マレーシアにおけるホームステイ・プログラムの歴史に関しては Yahaya が指摘しているが、1970年代初頭までさかのぼれるという (Yahaya 2009: 3)。政府がこのプログラムに本格的に力を入れ始めたのは、1990年代初めの第七次マレーシア計画においてであったという。今日のホームステイ・プログラムに参加するホームステイ・ファミリーは、次のような資格要件を満たした場合、観光省から認可章を与えられることになる。

- ・主要道路から近いこと。
- ・個別の寝室と適切なトイレの存在。
- ・犯罪歴がないこと。
- ・伝染性の疾病を患っていないこと。
- ・高い衛生状態。

認可章を得た後、家の所有者は農村地域開発省 (Ministry of Rural & Regional Development) の下にある農村発達研究所の主催する基本訓練に出席する必要がある (Yahaya 2009: 4-5)。Yahaya によると、2009年6月までに、全国で227の村落の3,264軒が参加した。そして、2008年には、68,416人のマレーシア人と23,117人の外国人がホームステイ・プログラムを体験したという (Yahaya 2009: 5)。

マレーシア観光省の発行する2008年版の28ページからなる *Homestay* という冊子に依ると、ホームステイ・プログラムは次のような特徴を有している。

- ・ホスト・ファミリーに紹介される前に、村長が暖かく歓迎してくれる。
- ・ホームステイする家はたいていは木製の伝統的マレー家屋である。
- ・伝統食が振舞われる。
- ・文化的舞踊や音楽などを体験することもある。
- ・ハンディクラフト製作を見学したり、体験することもある。
- ・アグロ・ツーリズムに参加する。
- ・野外活動に参加することもできる。
- ・伝統的なゲーム、たとえばコンカック (congkak) やセパタクロ (sepak takraw) などを楽しむこともできる。
- ・とくに学生のためのホームステイ・プログラムも準備されている。

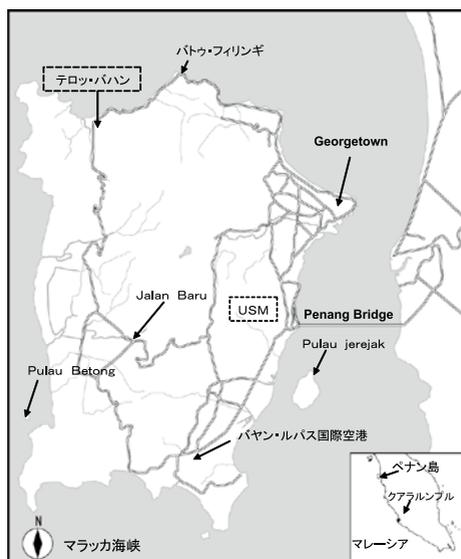
山下晋司は、2002年に初めてホームステイ・プログラムが導入されたサラワク州の一つの村 (キナバタン川河口のバトゥ・ブテ (Batu Buteh) 村) のミソワライ (Miso Walai) ・ホームステイを取り上げ、成功している事例として紹介している。ゲストは現地のエコツアーガイドとともに自然を散策したり、村落生活にも参加できる。ゲストは、川下り、文化の上演、ジャングルのトレッキング、ハンディクラフト製作、稲の植え付け、結婚式などの諸活動に参加するという。このプログラムを運営するミソワライ・ホームステイ観光コーポレーションによれば、2002年には425人のゲスト、2003年には530人のゲストを迎え、2003年に約110,000リングを得たという (Yamashita

2009: 197-8, 205)。

それでは、ペナン島のホームステイ・プログラムの場合はどうなのだろうか。

3. ペナン島のホームステイ・プログラム

ペナン島では2ヶ所、その南西部の小さな島・ベトン島、そしてペナン島に面する半島部の5ヶ所の計9ヶ所でホームステイ・プログラムが2008年から実践されている(地図1)。これらの9ヶ所で実施されているホームステイ・プログラムはペナン島観光協同組合(Koperasi Pelancongan Pulau Pinang Berhad: KOPEL)のパンフレットやインターネットのホームページなどを通じて、観光客には宣伝されている²⁾。これらのホームステイ・プログラムは、KOPELとICU(首相局)、ペナン地域開発局との協同プロジェ



地図1 ペナン島とテロツ・バハンの位置

クトで、ペナン観光局と連邦政府の観光省の支援によって推進されている。KOPEL によって9ヶ所のホームステイ・プログラムそれぞれを紹介した1つの冊子と、各ホームステイ・プログラムを紹介した個別の1枚物のリーフレットが用意されている。連邦政府の冊子には個々の参加村落などまでは取り上げられていない。

KOPEL によれば、次に詳述する事例村での1泊2日のホームステイは以下のような内容から構成され、少なくとも20名の予約が必要だという。そして、値段は1人当たり70米ドル（おおよそ210リング）である（<http://www.kopel.com.my> 2009年12月29日閲覧）。

表1 KOPEL によるテロツ・バハンでの1泊2日のホームステイの予定

時間	活動内容
1日目	
10時	歓迎の飲み物での接待
11時	簡潔な説明とホームステイ・ファミリーへのゲストの引渡し
12時	ホームステイ・ファミリーと昼食
13時	テロツ・バハン村のツアー
14時	蝶園とバティック工場へのツアー
15時	テレマッチー伝統的なゲーム
17時	ハイ・ティー —自由時間
18時	ホームステイ・ファミリーとディナー
19時	夜市での買い物
22時	就寝
2日目	
7時	ホームステイ・ファミリーと朝食
9時	自由時間
11時	お別れの儀式
12時	出発

他方、Yahayaの示す費用はKOPELのものとは大きく異なっている(Yahaya 2009: 10)。ホームステイ・プログラムの多くは、ホームステイ・プログラム委員会のようなコーディネイト集団によって運営されている。このような委員会はしばしば村落の村落福祉安全委員会(JKKK)の一部であったり、協同組合の形をとっている。たとえば、20名のグループで1泊2日のホームステイに参加し、1人当たり110リングを支払うとしよう。全体で2,200リングだが、歓迎の飲み物代、朝のティ、交通費、文化ショー、村のツアー、運営のために合計1,100リングを要し、ホームステイ・ファミリーにはゲスト1人あたり40リングが支払われる。したがって、委員会の収入は残りの300リングになる。委員会がJKKKの一部である場合、この利益は村全体の福祉と安全のために使われることになる。そして、個々のホームステイ・ファミリーはゲスト1人あたり40リングを得るが、そのうちから食事代、光熱費などおおよそ23リングを差し引くと、利益は残りの17リングということになる。もちろん、Yahayaの示す数値は一例であり、彼によれば実際には費用は60～120リングの範囲に設定されるという。しかし、それにしてもKOPELの示す数値とYahayaの示す数値の間には大きな違いがあるが、差額は主としてKOPELが費してきた広告費を含む運営費などに使われているのかもしれない。

4. テロツ・バハン(Kampung Teluk Bahang)のホームステイ・プログラム

4-1 テロツ・バハンとその近辺

テロツ・バハン村はペナン島北西部のマラッカ海峡に面し、かつては漁業を主とする漁村であった(地図1)。この地域には2009年9月時点でおおよそ300世帯、1,400人が居住している³⁾。民族的に見ればおおよそ60パーセントがマレー人、30パーセントが華人、そして10パーセントがインド人などからなっている。町のほぼ5キロメートル東にはリゾート地で有名なバトゥ・

フィリング (Batu Ferringhi) が位置し、海沿いに多くのホテルが林立している。ここからテロツ・バハンにかけては白い砂浜が延びている。テロツ・バハンの海に面する北の端一帯は、ペナン国立公園になっている。沿海部はマングローブで覆われ、沿岸部には珊瑚礁があり、また砂浜には海亀が産卵に訪れる。

テロツ・バハンでは2008年8月1日から、ホームステイ・プログラムが開始されている。この地区では2009年9月現在で11軒の家庭がホームステイを実践している。政府の求める要件を満たしたホームステイ先には、KOPEL・首相局・ペナン地域開発局が認可したことを示す、住所と氏名入りの認可章が入り口に掲げられている (写真1)。



写真1 A氏宅玄関入り口に掲げられているホームステイ・ファミリー認可章。(2009年9月5日筆者撮影)

テロツ・バハンの売り物の一つは、もちろんエコツーリズムのための国立公園である。そして、12種類の異なった種からなる熱帯の蝶を集めた蝶園もある。その他にも観光客を引き付けるであろういくつかの地点がある。まず、アグロ・ツーリズム関連の場所である。この地域の南側は丘陵地帯で、その一部が有料のラン農園として整備され、観光客を集めている。また、その近くには25エーカーからなる熱帯果樹農園が立地している。熱帯果実の王様と称されるドリアンをはじめとする果樹が植えられ、果実そのものやそれらの加工品も販売されている。収穫されるドリアンなどの一部はシンガポールへも輸出されている。この農園に入るためには入園料が課せられる。

人工物では、集落を6号線沿いに南下すると、テロツ・バハン・ダムが位置している。ここでは毎年ドラゴン・ボート・レースが行われてきた。

4-2 テロツ・バハンのホームステイ先の一つ、A氏宅

筆者はこの地区のホームステイ・プログラムのディレクターをしてきたA氏宅に、2009年9月5日から学生2人と事務局職員1人と共に1泊2日滞在した。A氏は48歳で水道局に勤務しながら、このプログラムに参加してきた。A氏宅は幹線道路6号線から徒歩10分弱である。A氏には妻と14歳、12歳、そして7歳の息子たちがいる。A氏はもともとこの村出身ではなく、妻がこの出身であり、彼女の父親の敷地に家を立て、小規模な畑とテラピアの養魚池などを設けている。また、同じ敷地には妻の父親の家だけではなく、妻の弟も家を立てている。妻の父親と弟は大工をしている。A氏は自家用車（プロトン：マレーシアの国産車）を有し、これで会社やショッピングに出かけるだけでなく、ゲストを近辺の観光スポットへ連れて行く。A氏夫妻はイスラム教徒であるが、筆者らが訪れた時期はちょうどラマダンの期間であり、本人たちは日中は断食を実践していた。しかし、筆者たちには異教徒として気を使い、飲み物を供してくれたりもした。

A氏宅はコンクリート製で、2寝室、居間、台所、そしてトイレ兼沐浴室からなっている(写真2)。2寝室にはそれぞれベッドが2つ設置されており、普段は家族がこれらを使用している。最大4名の客を宿泊させる場合、居間に簡易ダブルベッドが用意されていて、これで7歳の息子と夫婦が寝る。あとの2人の息子は、妻の実家で泊まることになる。

4-3 ホームステイと文化の学習

A私宅での1泊2日は、異なった文化のデモンストレーションとその学習の連続からなっていた。上述のように、ラマダ



写真2 A氏宅の正面(2009年9月5日筆者撮影)

ン月で、イスラム教徒は日中には飲食しない。夜の食事のための食材や食物を売る市は買い物客で混雑していたものの、イスラム教徒は誰も飲食していない。非イスラム教徒を案内するA氏はなにも口にしないが、普段から非イスラム教徒の華人やインド系住民もいるために、食べ物を頬張るゲストの姿は特別奇妙に写っていなかったであろう。

A氏宅では、子どもたちが伝統的な遊びを教えてくれて一緒に遊んだり、A氏の妻が料理を教えてくれたりした。米を蒸し、ココナッツミルクをかけて、混ぜる。そして、バナナを四等分して、バナナの葉で米とバナナを包み、再び蒸してクイ・プルット・ピサンという粽に似た食べ物の作り方を教えてくれる。キッチンに隣接する部屋は浴室であり、トイレを兼ねている。風呂といえば熱い湯が出ることに慣れきっているゲストは、ここで沐浴の意味を習うことになる。



写真3 クイ・プルット・ピサン作りを教えてくれるA氏の妻。
(2009年9月6日筆者撮影)

そして、ぎゃくにゲストの国では、どうかとホストに問いかけてくる。1泊2日は短いけれども、濃い文化交流の機会になることはいうまでもない。

4-4 ホームステイとコミュニティ・ツーリズム

①パティック工場

本ホームステイ・プログラムは一種のコミュニティ・ツーリズムになっている。6日の朝、他のホームステイ・ファミリー宅に滞在する学生と筆者らの全員がA氏宅に9時に集合した。それから、A氏が先導して、集落の中を散策した。A氏が集落内に自生する植物の説明をしたり、学生からの多

様な質問に答えながら、バティック工場に着いた。この工場は零細ではあるが、経営者を含めて5名が働いている。バティックの技術自体はもともとクラタンからペナン島にもたらされたものを、現経営者はペナンで習得した。今日、ペナンには工芸学校があり、跡継ぎが養成されている。



写真4 バティック工場で、チャンティンを用いてでのデモンストレーション
(2009年9月6日筆者撮影)

手製のチャンティンを用いて蠟で布に絵を描き、そして染め付ける。1枚の布(幅1メートル×長さ2.5メートルで、70パーセントが綿・30パーセントがレーヨン製)に蠟で絵を描くのに約6時間、そして8色の色付けが施される。染料はドイツから輸入されている。布はかつては日本から輸入されていたが、高価なために、今日では中国から輸入されている。蠟はインドネシアから輸入されたものが使用されている。現在はすべて手描きであるが、50年ほど前までは木製のスタンプで、そして次第に亜鉛製のスタンプに代わり、1980年頃から手描きになった。

経営者によれば、日本人、ヨーロッパ人、アメリカ人観光客がバティック製品をよく買った。しかし、2001年9月11日のアメリカ合衆国でのテロ事件以降、アメリカ人観光客を含め、観光客の訪問が減少し、バティックの売れ行きが大きく鈍化した。ただ、近年、中近東(とくにサウジアラビア)からの観光客が増えつつあり、バティック製のビーチウェアやナイトウェアを購入し、女性はこれらを室内着として使用するため、商売は徐々に持ち直し始めている。経営者は筆者を含め、学生たちに対して製品を並べ、購入を勧めた。

②ハンディクラフト店

バティック工場に隣接した経営者家族の居間で女性が手作りする、ラマダン明けの祭りハリラヤ (Hari Raya) 用の菓子作りを見物させてもらった後、筆者らはA氏に先導され、ハンディクラフトを生産する家庭を訪れる。途中で、やはりハリラヤ用の菓子作りを屋外でする女性たちを見学した。どこの家庭でも、屋外で菓子作りに励んでいた。筆者らを嫌がりもせず、中には焼きあがった菓子をくれる人もいた。

ハンディクラフトを生産する女性もホームステイ・ファミリーで、入り口に認可章が設置されていた。彼女は貝殻や流木、そして鳥の羽などを用いて、クラフトを生産していた。学生の何人かが比較的安い腕輪、首飾りなどを購入していた。生産者は、クラフトをバトゥ・フェリンギのホテルやテロッ・バハンのみやげ物店に卸もしていた。



写真5 屋外で菓子作りに励む人たち
(2009年9月6日筆者撮影)



写真6 ハンディクラフト製作の
デモンストレーション
(2009年9月6日筆者撮影)

③サウナ・マッサージ店

ハンディクラフト店を出て、一団になっての村落ツアーを終えた。筆者は、

A氏と共に、サウナ・マッサージ店へと見学に移動した。マッサージ店の経営者は50歳近くの男性で、26年前(1983年)からここでサウナ・マッサージ店を経営してきた。店を構えるまでは、近隣の顧客を訪ね回って、マッサージを施していた。彼は、いわゆるマッサージだけではなく、多様な



写真7 薬用植物の一部 (2009年9月6日筆者撮影)

薬草を用いた、漢方の知識が豊富で、東洋医学を施してもいる。店の周囲には、露地や植木鉢に多様な薬用植物が栽培されていた。また、彼は必要な植物を森でも採集していた。小さな容器にヒルも飼われていた。このような薬用植物に関する知識と使用方法は、彼の父方の祖母から伝授されたという。

村内のバティック工場、ハンディクラフト店、そしてサウナ・マッサージ店の3ヶ所では、案内されたゲストは何がしかの物を購入したり、サービスを受けることになる。また、村落周辺の店や「～園」でもゲストはなにがしかの代金を支払うことになる。ゲストはホスト・ファミリーにだけでなく、集落の他の成員の一部にも経済的に貢献することになる。したがって、ホームステイ・プログラムはコミュニティにとって経済的には少なからぬ正の影響を与えているといえよう。

4-5 ホスト・ファミリーの収入とゲスト

筆者らは、本ホームステイ・プログラムを自ら探し、手続きしたわけではない。マレーシア科学大学の国際部が準備した研修プログラムの一環として、2009年度から1泊2日のホームステイ・プログラムを組み入れてもらったのである。このプログラムのために、科学大学に対して研修費から1人当たり80

リングが支払われた。全額がホームステイ先に与えられたわけではない。まず、この両者の間に介在する KOPEL に対して80リングが支払われ、その一部がホームステイ先に与えられたのである。単純に1人当たり1泊2日で40リングがホスト・ファミリーに支払われ、年間500人が宿泊するとすれば、20,000リングの収入になる。そして、そのうちから食費、光熱費、シーツなどの必需品代を引いても、ホームステイ・ファミリーにはかなりの額が残る。したがって、ホームステイ・プログラムは重要な副業だというのが、そのとおりだろう。ただ、この詳細については今後の調査に委ねなければならない。

A氏がホームステイ・プログラムを始めた2008年8月1日からゲスト帳に残されたゲストの出身国を見てみよう（表3）。ゲスト帳に記入するのはかならずしもすべてのゲストではないし、家族連れで宿泊した場合、たいていは代表1人が記入している。したがって、ゲスト帳からだけでは開業以来のゲストの全数・出身地などを正確に把握することはできないものの、ゲストがどういった国・地方から来ているのかの一端を垣間見ることはできる。また、ゲストが滞在中何を評価したのかもおよそ分かる。

表3 A氏宅のゲストの宿泊時期・性別・出身国

(単位：人)

出身地（国）						
日本	ドイツ	韓国	アメリカ合衆国	カナダ	ペナン島	ペナン島以外のマレーシア
17	3	4	4	1	21	27

注：A氏宅に2008年8月1日以来設置されているゲスト帳に記載の資料より作成。

外国人客では、日本人が多く、大学から集団で訪問している場合もいくつかある。また、同じペナン島ながら、ジョージタウン近辺やクアラルンプールを含む当該国からの客も見られる。日本人のゲストが残したコメントには「料理がおいしい」「良い食べ物。素敵なホスピタリティ」「ありがとう。また戻ってきたい」などが見られる。ドイツからのゲストは「おいしい食べ物。素

敵な旅」、アメリカ人は「素敵で、静かだ」、韓国人は「たいへん居心地がいい。ここが好きだ。戻ってくるよ」、ペナンからのゲストは「たいへん素敵で、親切だ。たいへん満足している」、そしてクアラルンプルからのゲストは「すばらしいマレーシア風のホスピタリティでがんばっている」などと記している。ホームステイには、食やホスピタリティが重要な要素であることが分かる。

5. 小 括

本稿は十分な資料を用いた論考ではないが、2008年8月に始まったペナン島でのホームステイ・プログラムがコミュニティ・ツーリズムとしての片鱗を見せていることを含めて、ホスト・ファミリーとゲストとの関係の一端を示すことができたと考えられる。ただ、始まったばかりなので、これが持続的なツーリズムになりえるのかどうか、あるいはツーリズムに直接関与していないコミュニティの成員にどこまで受け入れられるのかといった点については、今の段階では何もわからない。

筆者が、9月7日に1人でA氏宅を再訪した帰途、バスでテロツ・バハンを発つバスに乗ったとき、20代と思いきイギリス人女性が乗り込んできた。彼女は漁師の家にホームステイしたのだが、あまりもの単調さにうんざりして2泊3日の予定を切り上げて、引き上げてきたのだという。筆者の滞在したA氏宅はどちらかといえば近代的な家屋で、テレビもあるし、車もある。そういう意味では、伝統的な生活とは程遠い。しかし、A氏や村人からこの伝統や自然環境について話を聞いて、筆者はたいへん興味深く思った。結婚の慣習や料理の仕方、薬用植物やその使い方などなど、リゾートホテルに滞在しては決して学べないような事柄が、個人宅やコミュニティには満載されている。ようは、何を体験したいかによって、ホームステイ・プログラムの価値が大きく異なることは言うまでもない。

本稿で扱ったホームステイ・プログラムがどの程度コミュニティ・ベースド・ツーリズムとして評価されることができるのか、またツーリストと現地の人達との接触が、現地の人たちにとってどのような意味を持つのかについては、今後の調査で明らかにされる必要がある。

<注>

- 1) 立命館大学文学部では、2007年度から夏期に『マレーシア海外研修プログラム』を実施してきた。マレーシア・ペナン島にあるマレーシア科学大学での数日間での講義にはじまり、バスで南下して、最終的にはシンガポールを訪ねる10日間あまりの研修旅行である。2009年度は、筆者が引率者の一人としてこれに参加した。この年度にはじめて1泊2日のホームステイ・プログラムが取り入れられ、10名の学生と事務局の1名と共に、筆者もこれを体験した。本稿は、この時に収集した資料に基づいている。A氏家族と村人の多くに心から感謝する。そして、なによりもこのようなプログラムを研修の中に組み込んでくださったマレーシア科学大学国際部の関係者に深く感謝する次第である。
- 2) KOPEL はもともと現存のトライショー（三輪自転車）の商売を維持し、ペナンの周辺部や半島でエコツーリズムやアグロツーリズムを推進するための母体として2005年8月12日に設立された。発足当時のメンバーはトライショーの車夫が中心であったが、次第に観光産業に関わるホームステイ・プログラムや個別の集団などの会員も参加するようになった。理事会は多様な職業を専門にする人たちから構成されているという(<http://www.kopel.com.my> 2010年1月2日閲覧)。

KOPEL のホームページによれば、ホームステイには3種類のパッケージが用意されている。それらはすべてのスケジュールと活動内容があらかじめ設定された完全なパッケージ (complete package)、ゲストが日帰りから二泊三日まで宿泊日数や希望する活動を選択できる、自由度が高い個別化パッケージ (customised package)、そしてホームステイと歴史遺産観光、温泉、ロブスター釣り、魚釣りなどの特別な活動を組み合わせてテーマ化されたパッケージ (themed package) からなっている。日帰りのものから、数日間滞在のプログラムまで、じつに多様なものが用意されている。
- 3) テロツ・バハンのコーディネーターA氏からの聞き取りによる。

<参考文献>

- 江口信清 (1994) 「エコ・ツーリズムとツーリズムのエコロジー—ベリーズの事例から—」
『立命館地理学』 6 : 1-12.
小長谷有紀 (1996) 「モンゴルにおける観光立国—観光装置と異文化理解—」石森秀三編『二

- 世紀における諸民族文化の伝統と変容 3—観光の二十世紀—』ドメス出版社, 123-138.
- Peaty, David (2009) "Homestays in Indian Himalaya," International Workshop on *Production Process of Tourism Space and Interface among Local People, Foreign Tourists and Foreign Workers: Comparative Studies on Asian Countries*, held at Ritsumeikan University in November 7.
- (2008) "Community-Based Ecotourism in Ecuador, Peru and Bolivia," *Proceedings of the International Symposium on the Socially Deprived and Self-reliance through Tourism*, held at Ritsumeikan University in November 1, 2008: 36-44.
- Pongporat, Kannapa (2009) "Social Capital in Community Participation for Local Tourism Development: A Case Study of Fisherman Village, Samui Island, Southern of Thailand," International Workshop on *Production Process of Tourism Space and Interface among Local People, Foreign Tourists and Foreign Workers: Comparative Studies on Asian Countries*, held at Ritsumeikan University in November 7.
- van Weert, Gerardus D.C. (2008) "Community Tourism in Runa Tupari, Ecuador," *Proceedings of the International Symposium on the Socially Deprived and Self-reliance through Tourism*, held at Ritsumeikan University in November 1, 2008: 45-59.
- 山口隆子 (2009) 「ホームステイという異文化への旅とその文化の求め方—アメリカで誕生したホームステイ団体の人類学的考察—」『旅の文化研究所研究報告』18 : 53-66.
- (2008) 「「ホームステイ」誕生の背景と求められた異文化体験—世界で最初のホームステイ組織・EILを事例に—」『神戸文化人類学研究』2 : 30-69.
- Yahaya Ibrahim Abdul Rasid Abdul Razzaq (2009) "Homestay Program and Rural Community Development in Malaysia." International Workshop on *Production Process of Tourism Space and Interface among Local People, Foreign Tourists and Foreign Workers: Comparative Studies on Asian Countries*, held at Ritsumeikan University in November 7.
- Yamashita, Shinji (2009) "Southeast Asian Tourism from a Japanese Perspective," M. Hitchcock, Victor T. King, and Michael Parnwell, eds., *Tourism in Southeast Asia - Challenges and New Directions* -. Copenhagen: NIAS Press: 189-205.